

TENTI TODAY 気になるニュース(中国旅行・旅行先での決済が大変・・・)			1
会員の広場 受信メール・(欧州連合・原稿送信)			3
随 想	「日々をいとおしみて」より「終戦の日を思う」	宮川典子	4
歴 史	仏独の和解と欧州連合(EU)の発展・繁栄について	佐川雄一	5
歴 史	陸奥宗光についてーその1ー	臺 一郎	7
歴 史	「了解日本(日本を知る)」(16)「長崎のみどころ」(4) 孫文は9回長崎に来た	兪彭年	10
回 顧	有楽町慕情(13)「MRAと石坂泰三」	津田孚人	13
講演会	「新三木会」(		16
事務局			16

\*\*\*\*\*

### TENTI TODAY

\*\*\*\*\*

猛暑からいっぺんに晩秋・初冬を迎えました。人間世界も大変ですが、自然界、動物界も大変です。上野では桜が咲き、北海道、東北では、食料不足に悩むクマが街に出没。地球環境に変化をもたらしたのは人間、戦争などしている場合ではないと思いますが・・・

\*\*\*\*\*

宝塚歌劇団の問題、戦前からの悪しき習慣を続ける組織、本質はなかなか変わらないようです。スタートした時の、理念、意図は、無視されがち。宝塚歌劇の創立者は阪急電鉄の小林一三。小林一三が生きていたら・・・。歴史を軽視、学び直そうとしない現代の風潮、日本の将来が絶望的・・・。

\*\*\*\*\*

毎月、定期的に開かれる「新三木会」、則松氏の努力下、大学の同窓会的な色合いが薄れてきました。10月は、**柯 隆氏**（東京財団政策研究所主席研究員）の「岐路に立つ中国社会の行方」、二つの警告「日本にはシンクタンクが少ない。」「戦術はあるが戦略がない。」が印象に残りました。会は、毎月、第三木曜日の午後にあります。お出かけください。

\*\*\*\*\*

前号・548号でお知らせした、「**兩岸猿聲～方攸敏・藤村遠山／傘寿記念 日中二人書画展**」(虎ノ門・中国文化センターで開催)に出かけました。

藤村遠山氏は、日本経済新聞・北京支局長(1987年～)、論説委員を経て、拓殖大学国際学部教授、学部長を歴任。書を本格的に始めたのは70歳からとのこと。金文、章草、隸書、篆書、行書、と多種多様な書体の作品を展示。「章草」は、初めて見る字体。会場で「章草」の普及に努めている**郭同慶氏**に会いました。11月3日日経新聞朝刊・文化欄に「幻の書体、日中に根づけ」という同氏の文章が出ましたので、一部抜粋してみました。ご覧ください。章草の書を掲載できず、申し訳ない

のですが、コピーは送れます。どうぞ、ご連絡ください。

### 11月3日・日経新聞朝刊、文化欄掲載の郭同慶氏文章より、一部抜粋

中国の漢の時代に生まれ、やがて姿を消した幻の書体が「章草」である。それを現代によみがえらせた中国人書家に憧れ、修行を積んだ私は、36年前の夏に来日。以来一貫して、日本での章草の普及に力を入れてきた。

章草は見た目には無骨で、あまり「美人」とは言えないかもしれない。しかし力強く奥深い味わいは、悠久の歴史を感じさせる。もっとも章草と聞いて、思い当たる人は少ないだろう。中国でも近代まで、ほとんど忘れられた存在だった。

紀元前の秦の時代以前に使われた古い書体は、曲線を中心として画数が多かった。簡単には書けないが、国の重要行事を記録するには十分だった。次に漢の時代になると、簡略化のため、直線が中心で幾分書きやすくした「隸書」が広まる。

しかし後漢から三国時代にかけての戦乱の世では、さらなる早書きが求められた。そこで自然発生的に生み出されたのが章草だ。軍事面の報告や、商人の活発な取引などに利用されたようだ。

章草の時代は長くは続かなかった。4世紀の東晋になると、書聖・王羲之が登場する。彼は章草を学んだ後、字の表情が豊かで美しい行書草書に発展させた。書道史は近代に至るまで王羲之一辺倒。章草は姿を消した。

これまで、章草を中心とした自身の個展や、中国の著名な書家を招いての書道展を開いて来た。そして日中平和友好条約45周年の今年、私の日本の弟子・藤村遠山と上海の画家、方攸敏が「日中二人書画展」を開催する。章草が日本にも広がりつつあることを実感する。

かつて師匠は字の「払い」を消すことで、章草を独自に発展させた。私は反対に、払いを強調することで、本来の章草に近づけようと意識している。自らの手で日本にも章草が根づき、さらに1%でも書体として発展させることができれば、それ以上の幸せはない。

\*\*\*\*\*

### 気になるニュース（10/30(月) 文春オンラインから(一部抜粋))

自販機でジュースも買えず…3年半で激変した「サイバー先進国・中国」の不便すぎる実態

先日、観光ビザを使って3年半ぶりに中国に行ってきました。中国は厳しい行動制限を伴う「ゼロコロナ政策」を経て、さまざまなITツールが活用されるようになり、“中国人にとっては”より便利になったんです。しかし、外国人観光客にとっては不便になったと感じました。

#### キャッシュレス化が進みすぎて街からATMや両替施設が激減

コロナ禍以降、中国で急速にキャッシュレス化が進んだことで、街からATMや、日本円を人民元にする銀行の支店や両替施設が減っていました。3年半ぶりの中国散策だったのに、街歩きでも不便さを感じました。

#### 中国で開催されたイベントで、入場できないトラブル

「うわあ、入れないよ。情けない……」 イベントに入場しようとした矢先、入口で頭を抱えました。入口に入場券売り場はなく、入口までの柱のオブジェに美少女イラストとQRコードが印刷されたポスターがあり、スタッフは「それにスマホをかざしてデジタルで登録しろ」と言うわけです。「わかった。中国語はできるので、登録しようじゃないの」とQRコードにスマホをかざすと、18桁の数字からなる中国人の身分証番号を入れる項目があるわけですよ。パスポートはアルファベットも含まれるし桁数も違うので、プログラムで弾かれてしまいます。

入場ゲートのスタッフは、なんでそんなに苦戦しているのか、と訝しげに私を見て、やり方を教えてくれるのですが、パスポートを見せて「外国人なんですよ……」と伝え、と、「パスポートですって。入場どうすればいいですかね」とスタッフが対応に困ってしまいました。

### 今度は中国のモバイル決済サービスが使えなくなる

僕がなんとか説明すると、入場ゲートにいる責任者まで話が伝わり、パスポート番号をメモしたうえでようやく通してくれました。

けれど今度は、イベント内で買い物をするとき、モバイル決済サービスのアリペイ（支付宝）やウィーチャットペイ（微信支付）が使えない。アリペイもウィーチャットペイも、VISA や Mastercard などの国際クレジットカードと連携したのですが、買い物で支払える場合と支払えずエラーになる場合があり、今回は運悪くエラーになってしまったのです。

仕方がないので現金で払おうとしたら、「現金でもらっちゃったよ……」という風にスタッフがまた困惑し始める始末。なんでイベントに参加するだけで、こんな苦勞をしなくてはならないんだと思いましたね。ちなみに、イベントは人気ゲーム「原神」のコスプレイヤーが集まったり、グッズの販売を行ったり、中国の声優が来てサイン会をしたりするものでした。

上記の 2 次元イベントのように、実名登録が必要なシーンでパスポートを受け付けない入力フォームや、サービス利用時の信用の担保で銀行口座の記入が必須の入力フォームがあるケースには、滞在期間中に何度も遭遇しました。

そのうえ、支払いにアリペイやウィーチャットペイが使えないケースがあるので、その際にはわざわざ財布から現金を出さなければならない。電子決済が使えないとか QR コード経由で登録できないときにモタモタしていると、後ろに並んでいる人やスタッフからジト目で見られているようで、恥ずかしいやら情けないやら。中国は、日本以上に空気を読む社会なので。

これから中国に旅行予定の人は、日本で人民元を用意し、持っているクレジットカードを何枚かアリペイやウィーチャットペイに紐づけておいたほうがいいですよ。そうしないと、場合によっては旅行開始時点でネットサービスが利用できず、買い物の支払い時に詰むかもしれません。

\*\*\*\*\*

## 会員の広場

\*\*\*\*\*

### 受信メール

\*\*\*\*\*

原稿送ります。（佐川雄一）

戦後、なぜ 独仏が和解の道を辿ったのか、その延長線に、欧州連合が創設され、現在 27 カ国で構成、繁栄しています。域内市民の移動の自由が保障され、どこで働くこともできます。国レベルでは財政規律が求められ、歳入比、歳出の赤字は 3% 以内に押えられています。そして域内に国境問題は存在しません。

EU 加盟候補国 はこの他に、モンテネグロ、北マケドニア、アルバニア、セルビア、トルコの 5 カ国があります。東アジアで或いはアジアで類似の国家連合ができないか考えたりしますが難しそうです。ご参考までに原稿をお送りします。

\*\*\*\*\*

## 連載

\*\*\*\*\*

エッセイ集 「日々をいとおしみて」(2022年11月)より 宮川典子(94歳)

### 終戦の日に思う

七十七年目の終戦の日を前に「そして、学徒は戦場へ」をNHKが放映した。私は食い入るように見た。学徒出陣壮行会。忘れもしない1943年10月21日、明治神宮外苑競技場での荘重な儀式である。

日本は1937年に日中戦争を、続いて四年後には太平洋戦争を始めた。戦場は中国から東南アジア、太平洋の諸島へと広まり、兵力が不足してきた。それまで大学生、旧制高校性、専門学校生は徴兵が猶予されていたが、理科系を除き、その制度が廃止された。

そして戦地へ赴く学生を見送る壮行会に、女学校四、五年生や、その他大勢の人が出席した。私は三年生だったので、家でラジオの実況放送に聞き入った。映画館のニュースで度々見たので、その光景は今も脳裏に焼きついている。カラーなどない白黒映画なので、一層悲壮感が漂う。

秋雨の降りしきる中、出陣学徒は脚はんを巻き、小銃を担い、歩調を揃えてあの広いグラウンドに次々と入場してくる。その数、何万人だろうか。東條英樹首相の訓辞、学徒代表の答辞の後、

海行かば 水漬く屍  
山行かば 草生す屍  
大君の 辺にこそ死なぬ  
かえりみは せじ

の歌を全員で歌い会は終了。学徒等は宮城まで行進したそう。戦況がかなり切迫してきた頃で、将来日本の指導者となるような優秀な人が多数戦死したであろう。

一方、女学生の私たちも翌年から授業は一切なく、工場で兵器の生産に従事した。やがて東京も米軍の烈しい空襲が続き、工場が長野県松代町に疎開するので、私たちもそれに従った。先生からの厳命が「夜は絶対外に出るな。昼間でも一人で出るな」であった。朝鮮の人が工事で多数働いているからとの噂がひそかに流れていた。

戦後松代に途てつもなく大きな防空壕が掘られていたと公にされた。御座所と大本営を東京から移す予定だったそう。勝つ当てもないのに本土決戦となったら、今頃日本はどうなっていただろう。当時の指導者は、どんな未来図を描いていたのだろう。

日中戦争では主要都市を陥落させても、中国の広大な土地を治めるのは無理だ。アメリカとの戦いで、真珠湾攻撃の華々しい戦果に日本中が歓喜したが、ミッドウェー海戦の敗退後は正確な戦況を知らされたことはない。

最後は「神国日本を守れ」「一億玉砕」などの空虚な言葉に惑わされていた日本国民、今の若い人にはとうてい理解されないだろう。

勉強意欲の最も強い学生時代には、工場で無線機の組み立てをやっていた。3月9日の下町大空襲では家を焼かれた。戦争は何一つ良いことはない。

現在の国際情勢はより以上に複雑である。私たちは何をすべきなのか。

\*\*\*\*\*

## 仏独の和解と欧州連合（EU）の発展・繁栄について 佐川 雄一（86歳）

### 1. 戦後、仏独が和解の道に進んだ背景

1939年9月、ナチスドイツがポーランドに侵略するとポーランドと同盟関係にあったフランス・英国は対独戦を宣言、茲に第二次世界大戦が始まった。欧州の西部戦線は暫く小康状態が続いたが、1940年5月、ドイツの機械化部隊がフランスに侵略すると翌月の6月にはフランスはドイツとの休戦協定の締結を余儀なくされ、以後4年間ドイツ軍に占領されることになった。戦後は、事態が逆転し、米ソ英とともにフランスはドイツを分割占領（1945～49年）することになる。

このように仏独は19世紀から20世紀を通して、占領し、占領される戦争を繰り返し、そのたびごとに国境地帯住民の国籍と貯蔵資源の所有権が変化した。度重なる戦争の惨禍から、第二次世界大戦に勝利したフランス・敗戦国になったドイツ、いずれの指導者・知識人も、戦争から得られるものは何もない、それよりも軍事的な対立を回避し、相互信頼に基づく恒久的な友好関係を築く仕組み作りこそ、欧州大陸の安定・平和・経済繁栄の礎になると考えるに至った。

第一次世界大戦後に締結されたベルサイユ条約で、勝者（英仏伊米）が敗者（独）に課した過重な賠償金、領土の喪失、軍備の制限が、敗戦国ドイツに社会・経済的な不安定と混乱を招き、アドルフ・ヒトラー率いる国民社会党の台頭を許し、再度、欧州を混乱の極みに陥れた歴史的事実を認識し、その有効な回避策を仏独両国の有識者が模索することになった。

最初にイニシアティブを採ったのはフランスの指導者・知識人であった。仏独の戦争を物理的に不可能にする方策を探るべく1940年代後半から集中的な議論がフランス国内で秘密裏に進められた。彼らの結論は、脆弱でもろい従来型の“宥和”ではなく、超国家的な視野に立って二度と戦争を起こさせない“仕組み”を創り出すことであった。

具体的には領土的帰属をめぐる両国がたびたび戦争を起こす原因となった石炭・鉄鉱石資源が豊富にあり、鉄鋼業が栄える仏独国境沿いの地域を、多国間による超国家的な共同管理・運営を可能にする仕組み創りであった。その後、西ドイツの指導者・知識人もフランス主導の研究会に参加し、仏独が共に具体的な構想創りに励むことになる。

### 仏独宥和の第一歩；「ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体」の設立

当時（1950年代前半）、石炭は依然として重要なエネルギー源であり、鉄鉱石は鉄鋼業・製造業の貴重な資源であった。即ち、石炭と鉄鉱石が軍事産業の中核を担っていたので、この戦略的資源と関連産業を関係国で共同管理すれば戦争のリスクは軽減されるとして、仏独と隣接諸国が共同管理・運営する超国家主義と国際法に基づく「国際間共同体」又は「部門統合方式」として安全保障上の目的を達

成しようと考えたのである。

フランス・西ドイツは、隣接国のベルギー・オランダ・ルクセンブルグ、そして大戦中はドイツの同盟国となり、戦後は孤立感を深めていたイタリアに参画を求め、この6カ国で組織体を組成することになった。かくして、西ドイツ・フランス国境に近いルール地方の石炭とアルザス・ロレーヌの鉄鉱石などの資源を超国家的な「国際間共同体」、具体的には、「ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体」(ECSC)が組織化されることになった。

1950年5月9日、フランスの外相ロベール・シューマンが内外に向けて仏独国境沿いの国際間共同管理構想(ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体)を発表するが、これが欧州連合(The European Union)の始動点となった。それ故に5月9日がヨーロッパ・デーとなり、毎年EUの記念日として祝われることになる。

その翌年、6カ国が設立文書に署名、1952年7月25日、共同体が発効する。さらに、1958年には欧州経済共同体(EEC)と欧州原子力共同体(EAEC)が誕生、1967年にこれら3共同体の執行・決定機関などが統合され、欧州諸共同体(EC)となる。これら一連の安全保障と経済繁栄を目指す連帯感が欧州内で高まり、1993年に欧州共同連合条約(マーストリフト条約)となり、単一通貨(ユーロ)の欧州連合の誕生につながっていく。

欧州連合(EU)の加盟国は、現在、27カ国。その先鞭がECSC 6カ国、他の21カ国はECの拡大過程で参加するが、それぞれの加盟年と加盟候補国を記す。

1952年 ベルギー、フランス、ドイツ、イタリア、ルクセンブルグ、オランダ

1973年 デンマーク、アイルランド、英国(2020年脱退)

1981年 ギリシャ

1986年 ポルトガル、スペイン

1995年 オーストリア、フィンランド、スウェーデン

2004年 キプロス、チェコ、エストニア、ハンガリー、ラトビア、リトアニア、マルタ、ポーランド、スロヴァキア、スロヴェニア

2007年 ブルガリア、ルーマニア

2013年 クロアチア

EU 加盟候補国 モンテネグロ、北マケドニア、アルバニア、セルビア、トルコ

EU 非加盟国 アイスランド、ノルウェー、英国、スイス、ボスニア・ヘルツェゴビナ

シューマン仏外相が宣言した石炭鉄鋼共同体構想は、第二次世界大戦後の仏独協調体制の始点と位置づけられ、西独のコンラート・アデナウアー首相はシューマン宣言を「西ドイツの転換点」と評価し、西ドイツが西側陣営に付く契機となった。

「ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体」の構想がまとまると、この構想創りに深く関わったロベール・シューマン仏外相は、超国家的機能を備えるセンシティブな地域協定は政治的な決着が必須と考え、西ドイツ・米国のキー・パーソンの合意を得るために動く。

最初にアプローチしたのは、西ドイツのコンラート・アデナウアー首相(1876 - 1967年、首相在位: 1949~63年)であった。アデナウアーは、戦前、ケルン市長を務め、ナチス体制に反対し度々投獄された経験を持つ。戦前、戦中、12年以上続いたヒトラー政権が残した負の遺産を一掃し、あらゆる犠牲を払っても独仏の宥和を成し遂げねばならないと首相就任時から決意していたので、国益が深く絡むルール地方

の国際管理には西独内で反対論が強かったが、シューマン外相の提案に賛同した。

又、アルザス・ロレーヌは、第一次大戦後、国際連盟の監督下で自治制が敷かれ鉄鉱石・炭田の所有権と採掘権はフランスのものになったが、1935年に行われた人民投票でドイツへの帰属が決まるなど、仏独間の係争地域であった。これらの係争地域を国際管理の下に置くという大胆な発想に対し、アデナウアーは自らリスクを採って合意した。

シューマン仏外相が考慮したもう一人の鍵となる人物が、米国のディーン・アチソン国務長官(1893～1971年、長官在位:1949～53年)である。当時、米国は圧倒的な経済力を持ち、米国の賛同がなければ、欧州に平和を構築することは不可能であった。

そこでシューマン外相はアデナウアー首相の合意を得た後、米国に赴き、アチソン国務長官と協議することになる。アチソンは1941年国務次官補、45～47年国務次官と国務省の在籍期間が長く、戦後、欧州復興の旗頭となった「マーシャル・プラン」の起草者、ジョージ・マーシャル国務長官の後任として1949年、米国務長官に就任していた。

アチソンは北大西洋条約機構(NATO)の創設にも尽力したが、ハリー・トルーマン大統領の信任が厚く、米政権対外政策の主要な立案者でもあった。シューマンはアチソンとの会談を実現、シューマン外相の構想(ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体)に耳を傾けたアチソンはその場で賛同した。ここで仏独友好の基盤創りとなる“ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体”の構想が外交面でも固まることになる。

ここまでの歴史的流れから判断すると、“独仏の和解”とその後の“EUの創立”は、初期段階においては、独仏の知識人・政治家、それと米国の経済・軍事・政治的バックアップがあって初めて具体化したことが読み取れる。

\*\*\*\*\*

## 陸奥宗光についてーその1ー

臺 一郎(75歳)



陸奥宗光は我が国の外交史に輝く外交官であり政治家である。その生涯、人物像、業績等を作家津本陽の「陸奥宗光の生涯 叛骨(上、下)」、元外交官で評論家の岡崎冬彦の「陸奥宗光(上下)」、そしてネットでの情報検索などから考察してみた。ちなみに岡崎冬彦(1930～2014年)の祖父岡崎邦輔は陸奥宗光の従兄弟である。

陸奥宗光(以下宗光と言う)は、幕末の紀州に生まれ、明治後半期に外交分野で歴史に残る実績と成果を上げた。明治 25 年発足の第二次伊藤内閣で外務大臣に就任し、幕末以来我が国の外交上の最重要課題であった諸外国との不平等条約の改正を果たした。更に日清戦争後の講和会議でも、我が国の国益の増大に大きな成果を上げ、それらの功績により叙勲で伯爵となった。しかしその頃から持病の結核が悪化し、明治 30 年 8 月 24 日にその生涯を終えた。

また宗光の二人目の妻である陸奥亮子は、その美貌と聡明さから 120 年近くを経た今日でも話題になるほどである。明治 21 年、宗光が米国公使としてワシントンに赴任した際には亮子を同伴し、現地では社交界の華と言われて注目されたし、駐日英国大使館の有能な外交官であったアーネスト・サトーも亮子夫人を大変な美人と称賛した。

さて、まずは陸奥宗光の生まれから病で亡くなるまでの生涯を大まかに紹介する。

宗光の生年は天保 15 年 8 月 20 日(1844 年)である。天保年間には、幕末から明治前半期に活躍した多くの志士達が誕生した時代である。宗光以外の天保 15 年生まれには、長州出身で同じく外交分野で活躍し、宗光と共に英国との不平等条約の改正に尽力した青木周蔵がいる。

また天保 11 年には清国でアヘン戦争が勃発。たちまち英国が勝利し、2 年後の講和条約で英国は香港割譲を勝ち取った。この情報はほどなく幕府にも伝わり、幕府首脳陣が国家統治における外交の重要性を明確に意識するきっかけとなった。

そんな中、宗光は和歌山藩の重臣伊達宗広の六男として和歌山城下に生まれた。父宗広は和歌山藩の勘定奉行で、国学者としても藩の内外に名を知られていた。祖先が陸奥伊達であったことから、宗光はのちに姓を陸奥に改めた。

安政 5 年(1858 年)、15 歳となった宗光は、単身江戸に出て昌平校入門を目指して学問に励んだが、父宗広から「これからは尊王攘夷派の時代だ。お前はそれに乗ってはどうか」と助言され、以後儒学の勉学を止め、尊皇攘夷運動に参加するようになった。

宗光は長州の桂小五郎(木戸孝允)や伊藤俊輔(博文)、土佐の乾(板垣)退助など尊攘派の志士達との交流を深め、中でも伊藤博文とは互いに気が合い、生涯にわたり交流する仲となった。その後父宗広が京に出て公家との交流を深めると、宗光も 1863 年の春から京の父のもとに身を寄せるようになった。父宗広を訪ねてきた土佐藩の郷士坂本竜馬と知遇を得た宗光は、たちまち 9 歳ほど年上の龍馬の人的な魅力や豊かな才能の虜となり、以後二人の関係は龍馬が暗殺されるまで続いた。

この年の 4 月、宗光は、勝海舟を塾頭として大阪に設立され龍馬も塾生であった幕府の海軍操練所(海軍塾)に入塾し、以後の 4 年間を大阪や神戸で過ごした。海軍操練所では、航海に必要な算術、代数、幾何、三角関数、対数などの習得に励み、宗光はその全ての科目で抜群の成績を表わした。

その後操練所は閉鎖されたため、宗光は龍馬が立ち上げた亀山社中、海援隊等に参加した。貿易事業等における宗光の手際や才覚は際立っており、龍馬をして「独立して自ら其志を行うを得るものは只余と陸奥のみ」と言わしめるほどであった。

明治維新後の宗光は、その才能や才覚を岩倉具視らの改革派の公家にも高く評

働され、兵庫県知事や地租改正局長などに任命されたが、薩長出身者を露骨に優遇する新政府のあり方に不満を持って辞職し、元老院議員となった。

明治 11 年(1878)、宗光は西南戦争に乗じて政府転覆を謀ったとして逮捕され、禁獄5年の刑に処せられたが、明治 16 年(1883)特赦により出獄、伊藤博文の支援を得て英国を中心とした2年余りの欧州外遊に出た。

宗光は山形監獄に収監中、獄の幹部の計らいにより英語の原書を含む 230 冊を超える書籍を取り寄せ、連日 8 時間以上を読書や政治・法律等の勉学に充てたという。また独学で英語を学び、獄内で英国の哲学者ジェレミー・ベンサム著書の翻訳に挑戦し、出獄後に「利学正宗(上下)」というタイトルで刊行までしている。獄内で多くの本を読む囚人は居るだろうが、原書の専門書の翻訳までやってしまう囚人は現在でも殆どいないだろう。

明治 16 年(1883 年)出獄した宗光は、翌明治 17 年(1884 年)6 月に日本を出発し、米国経由で 7 月 8 日にロンドンに到着した。ロンドンでは弁護士でケンブリッジ大学講師のワラカー博士から、英国における内閣制度の仕組みや議会運営の方法、日本の採るべき政治体制等について詳細な個人教授を受けた。それは例えば日本のような新興国においても、責任内閣制をただちに採用すべきか否かといった事柄であった。

明治 19 年 2 月、欧米外遊から帰国した宗光は、程なく外務省に出仕し、二年後の明治 21 年(1888)に、駐米公使としてアメリカに赴任した。当時の駐米公使はメキシコ公使を兼ねており、宗光は同年 11 月メキシコとの間に、わが国初の完全対等条約である日墨修好通商条約の締結を実現した。

帰国後は、第 1 次山縣有朋内閣の農商務大臣に就任し、明治 23 年(1890 年)の第 1 回衆議院議員選挙に和歌山県第 1 区から立候補して当選。1 期を務めた。

明治 25 年(1892)には第二次伊藤博文内閣で外務大臣に任命され、明治 27 年(1894 年)には、ロシアの南下姿勢に警戒感を強めていた英国に函館港の活用などを巧みに持ちかけることで、領事裁判権制度の撤廃や関税自主権の一部回復等を主たる内容とした完全に対等な日英通商航海条約の締結に成功した。当時の超大国である英国との条約改正の実現によって、各国は英国にならい、次々と日本と改正条約を結ぶこととなった。

さらに同年、清国との間で日清戦争が勃発し、我が国は清国に対し陸海で勝利し、翌 28 年に外相陸奥宗光は首相の伊藤博文とともに、下関で行われる講和会議に出席し、朝鮮、台湾、遼東半島の割譲という線で条約調印に向けて詰めていた。しかし調印直前になって、ロシア、ドイツ、フランスの3カ国が外野から遼東半島の我が国への割譲に強力に反対した。

もし我が国が無理押しすれば、裏で 3 カ国とつながっていた清国政府側は条約の調印を拒否しかねず、それは我が国の国益を損なうと判断した日本政府は遼東半島の領有を諦めて条約の調印に踏み切った。日清戦争で武器弾薬をほぼ使い果たし、当時軍事力では世界最強のロシアとの開戦を恐れた我が国政府にとって、結果的に早期の調印に漕ぎ着けたことは国益の増大に寄与する判断・選択となった。

明治 29 年 7 月、大臣を辞めた宗光は雑誌「世界之日本」を発刊した。その第一

号の冒頭で彼は以下のように語った。「かつての日本は日本人の日本であったが、最近では東洋の日本となり、今や世界の日本となろうとしている。東京湾の水の干満は、ゴールデンゲイトの水と相関連するように、日本は国際関係と無縁でいられない」と。まるで昭和 30 年代か 40 年代の政治家の言葉のようだ。

そして翌年の 8 月 4 日、宗光は東京西ヶ原の邸宅で 53 歳の生涯を終えたのである。

(以下は次号に続く)

\*\*\*\*\*

## 「了解日本」(「日本を知る」(第 16 回))

愈彭年 (86 歳)

### 長崎の見どころ(4)

#### 孫文は 9 回長崎に来た

孫文は 30 年の革命生活のうち 10 年以上を日本で過ごし、東京、横浜を中心に、中国人街のある神戸には 15 回、長崎には 9 回訪れている。

『孫文と長崎』(横山宏章・陳東華編、長崎文献出版社、2003 年出版)によると、孫氏の最初の長崎訪問は 1897 年 11 月、革命活動に協力した日本の友人、宮崎滔天(日本名:宮崎寅蔵、滔天は号、日本では宮崎滔天で有名)が故郷の熊本県荒尾を訪れた帰りに長崎に立ち寄った時、陳紹白、宮崎滔天と一緒に滔天の支持者・渡辺元にあった。

孫文は、1900 年、惠州三州田の蜂起(「庚子惠州の役」ともいう)の工作をするため、日本にいながら、中国、南洋の間を何回も往復し、その過程で三度長崎に来た。すなわち 6 月 11 日に横浜から船で香港に行く途中長崎に寄ったが、このときは上陸せず、8 月 26 日に上海駐在の英国総領事に会うため横浜から上海に行くときは、途中長崎に上陸し、丸山町で昼食をした後、大浦町の艦船販売業者と面談し、少休止した後、午後 6 時過ぎに再乗船している。

9 月 3 日には、上海からの帰途、長崎で「東洋日の出新聞社」の田中侍郎に会い、翌日長崎から汽車で東京に向かっている。随行したのは容闈だった。

孫文は義和団の乱を利用して鄭士良を広東省惠州に派遣して三合会衆蜂起を起こし、1900 年 10 月 8 日から数十日、向かうところはすべて勝利し、その隊は 2 万人強と発展したが、最後に弾薬が続かず、外国からの援助が難しくなり、解散を余儀なくされ、鄭士良は香港に退いた。

孫文は、日本の台湾総督から蜂起への支援を承認されていたが、日本政府が蜂起への支援を禁じていたため、この承認は破談となった。これが有名な惠州事件である。

第 5 回目は 1902 年 1 月 24 日、横浜から香港へ船で向かう途中長崎で一時下船、午前中 1 時間ほど市場を見学した後、船に戻り、午後は鄭芝良を伴って来訪記者と会見している。

第 6 回目は、横浜から香港へ向かう途中、長崎で 1 時間の停泊の間に、日本人の友人である金子克己が、剌汪精衛を伴ってロシア革命党東アジア本部長のニコライ・ラッセルへの面談を手配してくれていた。

第 7 回目は 1913 年 2 月 13 日、上海から船で長崎に到着し、孫文は既に亡命革命家ではなく、前の臨時大総統で全国鉄道の全権を持っていたので日本政府の

国賓待遇を受け、長崎市長の北川信氏は埠頭まで出迎え、上陸後は日本鉄道院が特別に手配した特別列車で東京に向かった。随行したのは戴季陶氏と日本の友人の山田純三郎氏であり以前長崎であった宮崎滔天(とうてん)が出迎えた。東京で日本政府の要人と鉄道資金の借款について交渉した後、孫は3月21日に汽車で長崎に戻り、この時が第8回目の訪問となった。長崎に2泊3日滞在し、23日に船で上海に向かった。

孫を迎えるために、長崎県知事の李家隆は、諫早駅に先回りして長崎に入る列車に同乗した。長崎駅では、長崎市長の北川信里が出迎えてくれた。当時の新聞によると、列車が駅に入り、花火が上がり、孫氏は列車後方の貴賓車から降り、歓声がホームを震わせた。毛皮の襟付きコートに大きなシルクハットをかぶった孫氏は、意気揚々と駅の2階の貴賓室に入っていったと言う。駅前に集まった群衆は万歳を叫び、孫は大きなシルクハットを振って歓喜に頷きながら、車で福島屋旅館へと向かった。翌22日は、午前中YMCAで「世界平和とキリスト教」の講演、福建会館で中国人と昼食、東洋日の出新聞社の鈴木天眼社長宅訪問、その後小島鳳鳴館で官民の歓迎会、夜は清輝亭で長崎医専の中国人留学生の晩餐会と忙しい一日だった。

孫文は青年会館での演説で、軍事大国化する日本へ警戒をするよう警告し、兎島蓬萊館での官民歓迎会で長崎と日本、中国の密接な関係を賞賛した。

23日 三菱造船所を訪問。午後5時、北川信里長崎市長と群衆の万歳三唱の中、上海へ向けて出航した孫氏の船は、バンドを乗せたモーターボート数隻の歓声に包まれながら長崎港の外まで進んでいった。長崎滞在中に宋教仁が暗殺されたことを知った孫文は、国民党本部に哀悼の意を表し、真相究明を求める電報を打った。

最後の第9回目の長崎訪問は、1924年11月23日、孫文が臨時政府の執政段祺瑞に招かれ、善後会議に出席するため、船で上海から天津に向かう際に長崎と神戸に寄ったが、長崎には上陸せず、船上で『東洋日の出新聞』の記者に「大亜細亜主義」の雛形を語った後、中国人留学生の代表にスピーチを行い、日本人と一緒に行動し、中日友好協力の必要性を理解してもらう必要性を強調した。孫文は天津で下船し、陸路で北京に向かったが、残念ながら翌年の1925年3月12日に59歳の若さでこの世を去ってしまった。

長崎の華僑は、革命軍による南京攻略と辛亥革命の勝利を祝って、1911年12月10日、長崎市民とともに、「光復大漢」「共和政体」と書かれた提灯を掲げ、中国の楽団と日本の楽団が行進するランタンパレードを行った。行列の後には、華僑と日本の楽団、コスチュームを着た歩兵や看護婦、模型の大砲や軍艦が登場、空前の盛況だった。

長崎中華総商会は、革命的な雰囲気の中で断髪を決議し、会長、役員が中心となって断髪を行った。華僑人社会から寄付が集まり、やがて1万ウォンが上海軍政を支えるために送られた。

長崎中華総商会は、神戸に設立されたばかりの中華民国華商統一連合会の呼びかけに応じ、連合会支部と改称した。年末には4,000ウォンを集め、中国紅十字を通じて革命軍に送金した。翌1912年1月、上海紅十字社の代表が募金のために長崎を訪れ、革命軍の記録映画を上映したところ、600人以上が鑑賞し、募金活動は成功した。

革命を支援するため、長崎医専や日本各地の医学校で学ぶ160人以上の中国人留學生が紅十字隊を結成し、1911年11月中旬に上海へ向かった。

上海軍政府の要請を受けた中華民国華商統一連合会は、神戸と横浜の華僑からなる決死隊を編成し、1911年12月11日、上海へ向かう途中長崎を通過し、長崎の華僑数百人が埠頭に出迎え、精洋亭で盛大な壮行会を行い、壮行会では7人の華僑青年が悲壮な情景に感動してその場で決死隊に加わった

1912年1月1日、南京で中華民国臨時政府が成立し、孫文が臨時大總統に就任した。翌月の春節には、長崎の中国人家族が新しい国旗である五色旗を立て、長崎の諏訪神社に参拝して、新しい国の誕生を祝い、その加護を祈ったのである。1913年2月13日、孫文一行が長崎に到着すると、長崎中華総商会の代表者がモーターボートで出迎え、長崎駅まで汽車で連れて行った。

3月21日に孫文一行が再び長崎に来た時、領事は領事館で歓迎晩餐会を開催し、孫文は列席した華僑代表20人余りに対して華僑たちを激励する談話を発表し、22日には北辰会館で歓迎会が開かれ、李家隆介長崎県知事、北川信里長崎市長をはじめ70人以上の中国代表団が出席し、中国人が集中する新地と広馬場の各家には色とりどりの塔と色鮮やかな旗が設置され、歓迎ムードは非常に盛り上がった。

23日に孫一行が帰国して埠頭に乗船した際、車列はわざわざ新地と広馬場を迂回して通り過ぎ、華僑たちに熱烈歓迎を感謝した。

孫文の名言にあるように、華僑は革命の母である。長崎での華僑の行動は、この有名な言葉を体現している。

私は長崎の大学で教鞭をとっていたことがあり、その時に長崎の華僑に会ったことがある。ある日、長崎の中国商人泰益の子孫である陳東華氏から、孫文博士と長崎、長崎中国人の密接な関係を記念して、上海市に孫文博士の銅像の寄贈を依頼できないか、と相談された。

長崎県と上海は友好交流関係にあり、孫文は9回も長崎に来た、長崎の中国人は祖国を愛し、祖国の革命を支持してきたのだから、歴史的記憶を残すために記念碑があってもいい、陳さんの考えだけでなく、長崎の中国人全員がこの考えを持つべきだと筆者は考えた。

そこで、上海市人民政府外事弁公室の関係部門に働きかけて、長崎にいる中国人の思いを伝えた。偶然にも上海市当局が孫文の新しい銅像を鑄造しようとしていたため、上海市人民政府外事弁公室は、孫文の銅像を長崎県に寄贈するよう市政府に報告したのである。

2001年11月19日、上海から韓正副市長を団長とする一行が長崎県を来訪し、明・清時代からの日中交流の歴史が凝縮された、今はなき唐人館跡にある長崎市役所北海会館の中庭に建てられた孫文の銅像寄贈と除幕式に出席した。銅像は長崎市館内町の福建会館の庭に立てられており、福建会館は今では存在しない唐人館の跡地にあり、明清時代以来の中日両国の交流の歴史が凝縮されている。

孫文の銅像は、日中関係の歴史と、長崎の華僑と祖国との血の通った関係を証言している。

有楽町 慕情 (13)

津田孚人(86歳)

「MRAと石坂泰三(1)」

1956年(昭和31年)12月に日本は、国連総会で、国連への加入が認められた。同じ時にMRA(Moral Re-Armament)の創始者、フランク・ブックマン博士が来日し、鳩山一郎首相と会見、日本政府は博士の日本への貢献を賞して勲二等旭日章を贈った。

学生時代、フランク・ブックマン博士の名、そしてMRA運動について耳にし、新聞などで目にする事は多かった。しかし、1957年(昭和32年)に岸信介内閣が誕生、日米安全保障条約締結をめぐって学生が安保反対の嵐に巻き込まれた時期になるとMRAを耳にすることも目にする事もなくなったような気がする。

最近3ヶ月ほど前に近くの古本市をのぞいたとき、「日本の進路を決めた10年」(元MRA日本駐在代表・バズル・エンドウィッスル著、藤田幸久訳)(発行所ジャパンタイムズ・2016年10月初版)を見つけた。パラパラとめくると石坂泰三の記事、写真があり直ぐに買い求めた。本書を読んで見て、戦後の日本で、官僚、経済界、労働界の中に腐敗が少なかったと言われてきたが、その裏には、MRA運動がかなり影響していたと思わされた。

最近の日本、全体的に道徳、倫理観に欠け閉塞感が漂っているように感じる。MRAの紹介、敗戦日本の混乱下での活動の歴史、そして石坂泰三が登場する場面を、同書から拾ってみる。

MRAは、第二次大戦の直前にアメリカ人・フランク・ブックマン博士によって「民主主義国はナチスドイツの脅威に対して軍備による再武装だけではなく、道義的精神的力の復活をもってあたるべきである」という確信によって生まれた運動であった。

1948年6月、ロスアンゼルスでMRAの国際会議が開かれ、その中心テーマは、「社会に政治的、社会的、経済的な変革をもたらすためには、個人の人格と動機にまず変化が起こらなくてはならない。」すなわち「もし人が何が正しいかということ、自分の生活や仕事の中で求め、それに従うならば、個人の問題や、国家の問題にも答えを見いだす力が生まれる」という考え方についてであった。

このとき、会議にぜひ参加したいという9人の日本民間人グループがいた。三井高維(三井家当主の弟)・英子夫妻、相馬恵胤・雪香夫妻、堀内健介(戦前、外務次官、駐米大使を務める)、等であった。彼らは、戦後初めて海外渡航をした日本人であった。渡航に際してはGHQとの長い交渉と30人のアメリカ下院議員の助けが必要だった。

堀内は、会議で日本人の気持ちを次のように説明した。「新憲法は、民主主義という機械を私たちに与えてくれました。しかし、それを機能させる新しい精神がもっと重要です。昨年来、民主主義の体制が崩壊していく国が次々と後を断ちません。破壊を目指す勢力が実際に世界に存在し、長年にわたって民主主義の枠組みが存在した国ですらその脅威にさらされているのです。

今からこうした勢力に対する具体的な解答を持つことは日本にとって欠かせないこ

とであり、民主主義の答えとなるイデオロギーを提供する世界的な勢力を作ることに  
関心を持った各国の指導者の方々とお会いするために私もこの会議に参加した次  
第であります。

「私たちがこれまでに受けた物質的援助とともに、民主主義を機能させる道義的、  
精神的な力を与えてくれるMRAに感謝を表したいと思います。」

翌24年、片山哲元首相（当時社会党委員長）夫妻らが日本人として戦後初め  
てスイスのコーにあるMRAの本部で開催された国際会議に出席した。世界各国か  
ら政治家、銀行家、実業家、農民、主婦などあらゆる立場の人々が集まっていた。

西ドイツのコンラッド・アデナウアー首相とフランスのロベール・シューマン外相も参  
加し、アメリカ下院の代表団も片山夫妻が滞在中に到着していた。

片山夫妻の一行には、当時最大の日刊紙であった毎日新聞の社員が同行、さら  
に堀内謙介、三井高維夫妻、日本政府からMRAでの研修を受けるために派遣さ  
れた青年6名、などが加わっていた。

会議後、一行は、西ドイツのルール地方、パリ、ロンドン、アメリカ縦断と各地訪問  
をするが、観光と交流の旅は、いずれの地でも温かく迎えられた。一番の驚きは、国  
連の一日だった。終戦後間もなくで、国連に未加盟の日本だったが、国連の高官た  
ちは、丁寧な歓迎をしてくれ一行を驚かせた。

1950年（昭和25年）早々に、ブックマン博士は、バズル・エントウィッスル、ケナ  
ストーン・トゥィッチェルの2人を日本に派遣した。博士が心にかけている日本の友人た  
ちを訪ねさせたかった。

進駐軍の管理下であり、査証を手に入れるのは大変だったが外交委員会委員で  
共和党の重鎮だったスミス議員の尽力で、取得を早め来日することが出来た。GH  
Qに赴き訪日の目的を説明、今後誰に会うかをその都度報告することにしてGHQ  
の協力を得ることが出来た。

二人は、三井夫妻、相馬夫妻、堀内謙介の案内で、吉田茂首相、一万田尚登  
日銀総裁、本田親男毎日新聞社主、議会の長老・尾崎行雄、そして多くの財界指  
導者に会った。

この間に、二人は東芝を訪問、終日を過ごした。その時の感想を残している。  
「まず主力工場を見学した後で会社幹部と夕食を共にし、引き続き懇談した。その  
結果、私たちは産業問題の根幹に触れることになった。この会社は、2万人以上の  
従業員を擁し、あらゆる種類の重電器を生産している。他の基幹産業の発展に戦  
略的な位置を占めたために、1940年代末には共産党活動のターゲットとなってい  
た。戦後結成された労働組合は、共産党員の支配するところとなり、三年間にわた  
った遅延行為、座り込み、ストライキといった戦術は、暴力的闘争も加わり、生産の  
機能をずたずたにし、倒産寸前にまで追い込まれた。

結局、政府と進駐軍が介入し共産党の組合幹部を追い出すことが出来た。私たち  
が訪れたときには、いまだに労使間に大きな摩擦が存在していた。

こうした暴力沙汰の真ただ中に東芝の社長になった石坂泰三は、組合の強硬  
派に毅然たる態度で臨み、その力強い経営のもとで東芝は上向きを始めた。

東芝に来る前は保険業界の切れ者としてならし、皇居の正面に位置する第一生  
命保険会社の本社はマッカーサー将軍の連合軍総司令部として接收されている。

石坂はその晩、行き届いたもてなしをしてくれ、他の重役と共にMRAの活動につ  
いていろいろと質問し、特に産業におけるチームワーク作りについて関心を示してい

た。」

バズル・エントウィッスル、ケナストン・トウィツェルの二人は、10週間をかけて日本中を訪ね、各界、各層、多数の日本人に出合っている。戦時中から外界との接触を絶っていた日本人、会う人の誰もが世界の様子に熱心な興味を示していた。外国の人々の生活ぶりを知って、そこから学びたいと皆が感じ、海外に旅行して自分の眼で見てみたいという当時としては不可能な夢に憧れている日本人が大勢いることも知った。

二人は、各界の代表による使節団を編成して、スイスのコーの本部で開かれる夏の国際会議に参加させ、そのあと何か国を訪問するという前年の片山哲夫妻が経験したようなプランを思いつく。日本訪問中、国の運営に影響力をもつ多くの人たちに出会ったが、彼らが日常の業務を離れてコーでの会議で世界に触れることにより、日本国内の道義的、精神的な方向付けと一緒に担う人々が必ずや現れるだろうと強く信じたのである。

この案を、大阪訪問の折に披露すると、熱狂的な反応があり、各地の知事、市長をはじめ、MRA に傾倒していると自称する人たちなど希望者が殺到したので、この計画に賛成し熱心であった一万田日銀総裁に、政府、経済界、労働界にいる総裁の友人の協力を得て人選を進めてもらうことにした。一万田は、財界指導者と相談して最も相応しい人を推薦するとともに、自ら資金調達の出来ない労働組合指導者の資金援助に協力した。所要資金は、MRA 関係の援助があるとみて、世界一周の資金として個人で2千ドル(1ドル・360円)必要とした。

5月になると、知事、市長、国会議員、実業家などが、秘書に2千ドル相当の円の大きな札束をもたせて押しかけて来た。しかし、参加者をどう決めるかという問題にもまして、円からドルへの為替交換が一番のネックになっていた。吉田首相と会談した折に、その問題を話したが、同情はしてくれたものの、マッカーサーが認可しなければどうしようもない、と言いつつも内閣としてマッカーサーに交換許可を申請してくれたが、却下された。結局、最後の手段としてワシントン在住のMRA の友人夫妻に寄付を依頼、出発4日前に必要なドルが確保できて、出発にこぎつけた。

出発の前日、二人は吉田首相に昼食会に招かれた。そこには、数名の閣僚と訪問団に加わる長老が数名いた。会の最後に首相は、こう挨拶した。

「1870年(明治3年)に西欧を訪れた日本の代表がその後の日本の歴史を変えました。今回の日本の代表も帰国後新しい歴史のページを開くことになると確信しています」と。

72名の大型使節団が結成されて、6月のコーの国際会議に参加した。石坂泰三も東芝社長としてこの使節団に参加している。

一行は、チャーターしたフィリピン航空に乗り、マニラ、カルカッタ、カラチ、テルアビブ、ローマで給油し、ジュネーブ空港に到着した。空港からバスでロシェ・デ・ネエ山の中腹にあるコー(CAUX)に向かった。

フランク・ブックマン博士は、日本人のために最大限、出来る限りの歓迎準備をしていた。一行は、二週間の間に50ヶ国の国々の人たちと交流した。フランス人とドイツ人、経営者と労働者、共産主義者と非共産主義者、クリスチャンとイスラム教徒、といった旧敵同士が和解に至った体験を聞き、仲直りした夫婦や、親子の話、そして

憎しみや恨みや嫉妬に答えを見いだした人たちと懇談した。

驚くことに、日本人参加者の中でも、長野県知事と長野市長、大阪市警視總監と大阪の労働組合の戦闘的な指導者など、これまでの対立を辞めるという人たちが出て来た。

\*\*\*\*\*

## 講演会のご案内

\*\*\*\*\*

●新三木会 **第143回講演会 12月21日(木) 13:00—15:00**

15:15—16:30(茶話会)

演題 『日銀の責任』

講師 野口悠紀夫氏 一橋大学名誉教授

申込 <https://forms.gle/wXc3pTEPdy4vuetj6>

(または新三木会へ mail)

会費:会場出席(受付払い)2千円、夫人千円、学生無料

・通信受講(振込)千円

A:銀行振込:三菱東京UFJ銀行 / 船橋支店

普通預金 0132853 新三木会(シンサンモクカイ)

B:郵貯銀行振込:郵貯銀行 普通・記号 10530

口座番号 36088281 則松久夫(ノリマツヒサオ)

第144回講演会(予定) **2024年1月15日(月) 14:00**

演題:ハマスとイスラエル/なぜガザで戦うのか?

講師:高橋和夫 中東問題研究家

\*\*\*\*\*

## 事務局

\*\*\*\*\*

天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

住所:〒116-0001 荒川区町屋3-2-1

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス:[tentisenior06@gmail.com](mailto:tentisenior06@gmail.com)

電話・FAX:03-3819-7651